

# 松野陽一氏蔵『補缺類題和歌集』の成立

——恋部二の視点から——

三 村 晃 功

## 一 はじめに

筆者はこれまで中世に成立した類題集を中心にして研究を進め、それらの論考をまとめて『中世類題集の研究』（平成六・一、和泉書院）なる拙著を刊行したが、近時は古典和歌を例歌として収載する近世に成立した類題集の研究にもっぱら従事して、撰者不詳の『明題和歌全集』や霊元院撰の『新類題和歌集』などに関する論考を公表してきたのであった。そのような研究状況のなか、後水尾院撰の『類題和歌集』についても、拙稿「後水尾院撰『類題和歌集』の成立——夏部の視点から——」（『光華女子大学研究紀要』第二十八集、平成二・一二、前掲拙著に所収）や、同「北駕文庫蔵『類題和歌集』について——夏部の視点から——」（『中世文学研究』第二十三号、平成九・八）、同「北駕文庫蔵『類題和歌集』の成立」（『語文』第七十一輯、平成一〇・一〇）、同「版本『類題和歌集』未収載歌集成——北駕文庫蔵『類題和歌集』と比較して——」（『光華女子大学研究紀要』第三十六号、平成一〇・一二）などの論考を公表して、後水尾院撰『類題和歌集』の基礎的研究にいくらか貢献してきたのであった。

ところで、後水尾院撰『類題和歌集』には、歌題を掲載していないながら例歌（証歌）を欠落している箇所が、版本で二千

九百余りにのぼるために、それらの欠落歌のみを各一首ずつ集めた、加藤古風編『類題和歌補闕』なる版本まで刊行されているが、筆者はこの『類題和歌補闕』についても考察を加えて、前掲拙著の第四章第三節に、『類題和歌補闕』の成立なる拙稿を収録しておいた。ちなみに、後水尾院撰『類題和歌集』を大幅に増補した類題集に、葛山為篤編『続類題和歌集』があるが、この作品については、有吉保氏に「草稿本『続類題集』について」（『鈴木知太郎博士古稀記念国文学論攷』昭和五〇・一〇、桜楓社）なる基礎的論考がある。

このように、後水尾院撰『類題和歌集』の増補版もしくは補訂版は、本体そのものが比較的完成品に近かったためか、それほど多くの出版、刊行をみなかったようだが、このたび、筆者は松野陽一氏から、ご架蔵のこれらの作品と性格を同じうする類題集『補缺類題和歌集』なる写本を拝借する機会に恵まれたので、以下に、当該書について詳細に調査、検討した結果をここに報告して、総体的に遅れている近世類題集研究の補足に及びたいと思う。

大方の厳しいご批正を賜らば、幸甚に思ふ次第である。

## 二 内 容

さて、松野陽一氏ご架蔵の『補缺類題和歌集』の書誌的概要について言及すると、該本は「恋部二」のみの端本。縦二五・七センチ、横十七・五センチの袋綴写本一冊本。丁数九十五丁。遊紙は前後の各二丁。表紙は唐草模様の地で、左上方に題簽を貼付するが、書名は摩滅して判読不明。目録題に「補缺類題和歌集 恋二」とある。本文料紙は楮紙。歌題目録が冒頭にあり、次いで和歌本文がくる。一面十四行書きで、最上部に歌題を掲げ、続いて集付（出典注記）を記し、次いで和歌本文を掲げて、最下部に詠作者名を記す。江戸初期～中期ごろの書写か。歌数は、例歌を欠落して歌題のみの部分を除外して計算すると、二千五百四十三首。

以上が『補缺類題和歌集』（恋部）の書誌的概要だが、次に、本集の内容を具体的に紹介するために、本文の冒頭部分を引用してみると、

逢恋 玉葉 物思ひは今朝こそ増れつらかりしことはことにもあらぬ也けり 小弁

風 今更にくるしさ増る逢坂の関こへなばとなに思ひけん 源兼氏朝臣

（以下、十四首省略）

会恋 家 かさねてもなを夢とのみたどる哉かへしなれぬる夜の衣は 義政

いかにまどふ夢の枕によそながら打出るほどのことのはもなし 後柏原院  
忘るなよもしながらへん後の世もかゝるわりなき夢をみましや 逍遙院

（以下、六首省略）

初逢恋 千載 恋く／＼て逢うれしさをつゝむべき袖は泪に朽絶にけり 藤原公衡

同 君やたれ有しつらさは誰なればうらみけるさへ今はくやしき 源俊頼

（以下省略）

のとおりで、「逢恋」の題下に例歌を十六首、「会恋」の題下に例歌を九首、「初逢恋」の題下に例歌を四十二首それぞれ掲げるといふ体裁である。

ちなみに、本集の当該箇所を、書名が酷似する『類題和歌補闕』のそれと比較してみると、『類題和歌補闕』の場合は、

久祈逢恋 碧玉 とし月の神のしるしを人に見て猶たのまれぬ新枕かな 政為

行遇恋 春夢 奥ふかく引かへしても送り来月やはしらぬさよの小車 肖柏

及暁遂会恋 家集 よもすがら妹が結べる下ひもは鐘とともに打とけにけり 頼政

早元逢恋 林葉 鳴ぬなり鳥はそらねにあらねども明てぞとをす逢坂の関 俊恵

のとおりで、この記事は、『類題和歌補闕』の書目のとおり、後水尾院撰『類題和歌集』（版本）の例歌（証歌）を欠き、歌題のみを掲げている箇所、該当する例歌を掲げるといふ記述になっている。

この両者の記述の違いをみると、『補缺類題和歌集』なる類題集は、後水尾院撰『類題和歌集』の例歌の欠落した部分を「補缺」することを目的に撰集された類題集ではなくて、後水尾院撰『類題和歌集』そのものを、さらに全面的に改訂、増補することを目的に編纂された類題集ではないか、という推測を示唆するのである。

このような視点から、『補缺類題和歌集』の内実を詳細に知るために、本集を、後水尾院撰『類題和歌集』の内容と比較するべく、元禄十六年刊『類題和歌集』（版本）と北駕文庫本『類題和歌集』（写本）の二本によって検討してみたところ、次のごとき事象が明白になった。

まず、最初に提示するのは、三本ともに内容的に異同が認められる事例で、それは『補缺類題和歌集』の「見増恋」題の例歌八首に関わるものである。

- 1 袖もかくしぐるべしやは夕月よほのか成つる雲の名残に  
(見増恋・春夢・牡丹花・一〇五二)
- 2 花の色をみかきが原の夕より折ぬ歎のそふとなりまし  
(逍遥院・一〇五二)
- 3 行てみし後こそさらにあだ浪のへだてもうけれ浦の初嶋  
(同・一五〇三)
- 4 よそにこそ忍ははてめ山桜たちそふ花の俤はうし  
(一人・政為・一〇五四)
- 5 わたつみのみるめ刈にぞいと猶身はしづむべきえにしつらしも  
(永正元八廿公・重治・一〇五五)
- 6 我思きへしは人の数ならでみて社いとこうかれわびぬる  
(文明十六卅内裏女中・勾当内侍・一〇五六)
- 7 浅からじ浅かの浪の夢の名のかつみしはるも深き思ひは  
(寛正四四廿五公・教国・一〇五七)
- 8 俤をみしはしばしの歴めもおもふは終の思ひなりけり  
(称名院・一〇五八)

以上が『補缺類題和歌集』の「見増恋」題の例歌八首であるが、これを版本『類題和歌集』で見ると、該本は「見増恋」

の歌題を掲げるのみで、例歌（証歌）を一切掲載していない。これに対して、北駕本『類題和歌集』をみるに、該本は2の歌のほか、

9 いかにせむ及ぬなだのみるめゆへ猶波みゆる袖のうらみを

（実量）

の9の詠の都合二首を掲げるのみで、要するに、「見増恋」の歌題に関する例歌の採録状況からみると、これらの三種類の伝本はまったくその内容を異にする伝本といわねばなるまい。

とはいえ、『補缺類題和歌集』の内容を詳細に検討すると、他の二本とも共通する記述もなしとしないようである。それでは、『補缺類題和歌集』と共通する記述をより多く有し、より近似するのはどちらの伝本なのであろうか。次に、この問題の検討に入りたいが、その前に、『補缺類題和歌集』と版本および北駕本『類題和歌集』との関係について、もう少し検討を加えておきたいと思う。

そこで、「絶後悔恋」の例歌を、『補缺類題和歌集』から引用すると、

10 天の戸や明て別し暁のなごり空をなにうらみけん

（絶後悔恋・順徳院・一二九五）

11 かれはてばいかにせんとか蟹のすむ里のしるべを尋初けん

（師兼・一二九六）

の10・11の詠のとおりだが、版本と北駕本の『類題和歌集』はともに、

12 何とたゞくるのやちたび歎らん心とたえじ中川の水

（版本・師兼）

の12の詠一首を「絶後悔恋」の例歌として掲げるのみで、『補缺類題和歌集』と異同している。すなわち、版本と北駕本の『類題和歌集』とは一致した内容を有しているのに、『補缺類題和歌集』のみは孤立しているのである。

また、「絶後顕恋」の例歌をみると、『補缺類題和歌集』は、

13 思ひ出るかひこそなけれ今更にうき名立なるむかし語りは

（絶後顕恋・家・兼好）

14 我だにももらす浮名と成にけりあひみし比の昔がたりは

（同・慶運）

の13・14の二首を掲げているのに対し、版本と北駕本『類題和歌集』は、

15 人しれぬ尾花がもとは中／＼にかれにし後ぞ頭れにける

(版本・絶後頭恋・摘・法印慶運)

16 ありはてぬ名をもらすこそ山水のたえしに増るつらさ也けり

(同・頓阿)

の15・16の二首を例歌にしており、『補缺類題和歌集』のそれと異同している。

このように、版本と北駕本『類題和歌集』が内容的に一致して、『補缺類題和歌集』のそれと異同している事例は、枚挙に遑がないが、これは両者がともに『類題和歌集』の伝本であるわけだから、よく考えてみれば、両者の間に共通点がしばしば認められるのは至極当然の現象ともいえよう。

それでは、『補缺類題和歌集』は、版本『類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』とでは、どちらの伝本と共通する側面が多く指摘されるであろうか。この観点から両者との比較、検討を詳細にしてみると、『補缺類題和歌集』は、版本『類題和歌集』と共通する事例が比較的多く指摘されるようである。

まず、歌題の視点から検討してみると、「積逢恋」の題をみると、『補缺類題和歌集』も版本『類題和歌集』も、ともに歌題を掲げるのみで、例歌を欠落しているのに、北駕本『類題和歌集』のみは、

17 つらからぬ身のならはしと成にけりとすれば積る中の年月

(新千・為明)

の17の詠を掲げて、両者間に異同が指摘される。これと同様の事例は「空帰恋」の題についても、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とは歌題を掲げるのみで、例歌を欠落しているのに、北駕本『類題和歌集』だけは、

18 夕塩のみつともいはじあだ波のよるよりはやく立帰しを

(親元)

の18の詠を掲げているのである。ここに、歌題について、例歌とともに欠落している点で、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とが共通していると認められよう。

次に、和歌本文の視点から検討してみると、「逢不逢恋」の歌題の例歌(証歌)は、『補缺類題和歌集』も版本『類題和

歌集』もともに百八十九首を数えるのに、北駕本『類題和歌集』は百七十八首しか掲げず、『補缺類題和歌集』の本文で示すと、

19 泊瀬川又みんとこそたのみしか思ふもつらし二もとの杉 (釈阿・八四三)

20 しばしこそぬよあまたとかぞへても猶山のはの月を待しか (新宮撰歌合・左大臣・八五六)

21 あひみしは昔語の現にてそのかねごとを夢になせとや (同・内大臣・八五七)

22 哀なる心の闇のゆかりともみしよの夢を誰か定めん (公経・八五八)

23 契りきやあかぬ別れに露をきし暁ばかりかたみなれとは (通具・八五九)

24 忘れじのことはいかに成にけんたのめしくれば秋風ぞふく (丹波・八六〇)

25 恨みわびまたじ今はの身なれ共思ひなれにし夕ぐれの宿 (已上同・寂蓮・八六一)

26 里はあれぬむなしき床のあたり迄身はならはしの秋風ぞ吹 (家集・同・八六二)

27 明しかねまたる、物と成にけりさしもいとひし鳥の八声も (宝治歌合・女房・八六五)

28 思ひ侘心にも忘れぬとなげきいひてもねはなかれつ (実雄・八六七)

29 いとはる、つらさあるよの逢事をなにぞは又と契置けん (信実・八六九)

の19、29の十一首を欠落しているのである。この事例から、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とが近い関係にある伝本であることは疑いえないであろう。

次に、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とが関係の深い伝本であることを証拠づけるのは、作者表記が一致をみている事実であろう。たとえば、「別恋」の題の例歌である『続千載集』からの一首を、『補缺類題和歌集』から引用すると、

30 くもれたゞ後に忍ばん影もうし我かへるさの有明の月 (藤原宗行・三五二)

のとおりで、版本『類題和歌集』の作者表記と符合しているが、実は、この作者表記は間違いで、北駕本『類題和歌集』が示しているように、「藤原宗秀」と表記されなければならない。なぜ両集がこのような誤記をしているのかを推察するに、『続千載集』の当該歌の直後の歌の作者が「藤原宗行」であったために、両集のいずれかが引用する際に、うっかり誤ったために生じたからであろう。この事例も、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とが密接な関係にある伝本であること示唆するであろう。

最後に、注記の視点からみると、『補缺類題和歌集』の「忍逢恋」の題の例歌である、

31 泪のみもるや関やの板びさしあわぬ月日をさて過しつる

(続後拾・後嵯峨院・九四)

の31の詠と、同じく、

32 かひなしや逢夜は夢とまざるともうき世語りの現なりせば

(仙洞歌合宝徳二十・式部卿親王・一二七)

の32の詠には各々、「是より以下卅三首、不逢恋卜集二見ゆ。本ノマ、」、「是より以下十一首、逢恋歟。本ノマ、」の歌題の是非についての注記が付せられている。この注記について、両類題集との比較を試みてみると、版本『類題和歌集』は注記の記事を有して『補缺類題和歌集』と符合するのに対して、北駕本『類題和歌集』は一切注記を載せず、両者に異同が指摘される。この注記の有無の実態からも、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』とが影響関係にある伝本であることは、言を待たないであろう。

以上、四つの視点から検討を加えた結果、『補缺類題和歌集』が密接な関係にあるのは、北駕本『類題和歌集』ではなく、版本『類題和歌集』であることを実証したが、それでは、『補缺類題和歌集』は、まったく北駕本『類題和歌集』とは共通する側面は持たないのであるか。この点について詳細に検討してみると、完全に『補缺類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』との内容的一致はみられないものの、版本『類題和歌集』とは一致せず、部分的には『補缺類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』との共通する側面を否定することのできない事例はいくつか認められるようである。

その点について、ここでは「及暁遂会恋」「稀問恋」「恋不知程」の三つの歌題の例歌（証歌）の視点から検討を加えてみたいと思う。まず、「及暁遂会恋」の題の例歌を、『補缺類題和歌集』から引用すると、

33 よもすがら妹が結べる下紐はかねとともにぞ打とけにけり

（及暁遂会恋家・頼政・一六九）

34 鳴ぬるか鳥は空ねにあらねども明てもとをす相坂の山

（林葉・俊恵・一七〇）

の33・34の二首を掲げているが、版本『類題和歌集』が歌題のみ掲げているのに対して、北駕本『類題和歌集』が33の頼政の詠一首を載せているのは、部分的にはあるけれども、『補缺類題和歌集』との共通する側面を示していよう。

また、「稀問恋」の題の例歌について、北駕本『類題和歌集』から引用すると、

35 をしあてにうたがふ方の恨をもしらずや我もたえま置らん

（稀問恋・後柏原院）

36 花にとひ月にとはる、便だにかたきぢりを思ふくるしさ

（文明十三十八・義尚）

のとおり、35・36の二首を掲げているが、この点について、版本『類題和歌集』では、35の一首を掲げるのみなのに、『補缺類題和歌集』がこの二首のほかに十三首の都合十五首を掲げている点では、三本ともに独自本文を掲載しているとも考慮されようが、しかし、部分的には36の例歌を載せている実態からみて、『補缺類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』とが共通する側面を有していると判断することは、否定できないであろう。

また、「恋不知程」の題の例歌を、北駕本『類題和歌集』から引用すると、

37 せきもあへぬ涙にて杜我恋の積れるほどをしるべかりけれ

（恋不知程・俊頼）

38 その程と思ふも恋も限だに有よをせめてしる身とも哉

（実隆）

39 限ある思ひをしらば筆の海人の心にくみつくすとも

（後柏原院）

の37・39の三首を掲げるが、この点、版本『類題和歌集』が37と39の二首しか掲げていないのに、北駕本『類題和歌集』がこの三首のほかに九首を掲げ、都合十二首の多きに及んでいる点では、三本ともに異なる伝本であると言えようが、部

分的には、『補缺類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』とが38の詠を載せている実態から、両者が影響関係にある伝本であることは許されるであろう。

以上の検討から、部分的には、『補缺類題和歌集』と北駕本『類題和歌集』とが影響関係にあった側面は否定できない事実であることが明白になったと言えるであろう。それでは、『補缺類題和歌集』がどちらの伝本とより近い関係にあったのであろうかという、それは総合的に判断して、版本『類題和歌集』であったと判断しなければならないであろう。要するに、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』との影響関係をここに認めうるわけだが、それでは、その関係性の度合はどの程度であるのかの点に言及すると、すでに指摘した「見増恋」の題に関する例歌（証歌）の問題や、ここにはその例歌（証歌）を掲げることは省略に従うけれども「心中恨恋」「絶後恋」の歌題についての事例や、そのほかに両者間で齟齬をきたす事例を指摘することがそれほど困難でない程度に散見する事例からみて、『補缺類題和歌集』と版本『類題和歌集』との関係性は、基本的には明白に存在するという程度に留めておきたいと思う。そして、両者間の先後関係を想定すれば、論証は省略に従うことにするが、その書名の『補缺類題和歌集』の「補缺」が示唆するように、版本『類題和歌集』が『補缺類題和歌集』に先行することは論を待たないであろう。

### 三 歌題の問題

それでは、『補缺類題和歌集』はどの程度の歌題を収録しているのだろうか。この問題について、「恋部二」の目録に掲載されている当該歌題と、後水尾院撰『類題和歌集』とを比較、検討してみた結果は、次のとおりである。すなわち、次に掲げるのは、『補缺類題和歌集』の恋部二の歌題のすべてであるが、便宜的に各歌題に仮番号を付した。ちなみに、○印を付した歌題は、『補缺類題和歌集』のみが掲載する歌題であることを意味するが、各歌題が例歌（証歌）を有している

か、有していないかの問題は、この際、不問に付すことにした点を断っておきたいと思う。

1 逢恋	2 ○会恋	3 初逢恋	4 依初逢恋	5 俄初逢恋
6 ○白地逢恋	7 ○尋逢恋	8 ○契逢恋	9 ○互契恋	10 ○逢契恋
11 不慮会恋	12 忍逢恋	13 待逢恋	14 ○祈恋	15 久祈逢恋
16 祈逢恋	17 行遇恋	18 ○年々逢恋	19 毎月逢恋	20 昨艶今遇恋
21 暁会恋 <sup>逢イ</sup>	22 暁遇恋	23 及遇遂会恋	24 早旦逢恋	25 毎昼会恋
26 ○夕遇恋	27 ○夜逢恋	28 ○一夜逢恋	29 初夜逢恋	30 夜深逢恋
31 逢夜有妨恋	32 隔一夜逢恋	33 隔夜逢恋	34 絶夜逢恋	35 ○逢後恋
36 会后恋	37 相逢思恋	38 隔物逢恋	39 辞后会恋	40 会后忍恋
41 逢後契恋	42 逢切恋	43 逢後切恋	44 遇後顕恋	45 ○名をかへてあふ恋
46 ○学地名と云恋	47 逢隱名恋	48 会后隱恋	49 逢後難逢恋	50 遇不告恋
51 積逢恋	52 適逢恋	53 ○適逢空恋	54 邂逅会恋	55 時々逢恋
56 稀逢恋	57 稀会不絶恋	58 稀逢絶恋	59 ○逢不尽恋	60 ○物日逢恋
61 ○忘逢恋	62 ○逢恨恋	63 中絶後遇恋	64 絶后会恋	65 絶後逢恋
66 ○みちの中にあふ恋	67 逢門恋	68 近所逢恋	69 山家逢恋	70 旅山家会恋
71 ○嫌会所恋	72 ○人違逢恋	73 ○怨遇人恋	74 ○卜遇恋	75 逢夢恋
76 夢会恋	77 夢逢恋	78 夢遇恋	79 夢中逢恋	80 ○相对如夢寝
81 鞆中会恋	82 旅宿会恋	83 逢無実恋	84 乍臥無実恋	85 臥無実恋
86 迎不遂恋	87 語恋	88 無一相語恋	89 並枕語恋	90 隔物談恋

- 91 ○夢中談恋  
 96 ○人にわかるゝ恋  
 101 忍別恋  
 106 惜別恋  
 111 ○深夜別恋  
 116 恨別恋  
 121 ○別後  
 126 帰恋  
 131 朝帰恋  
 136 ○よごとにかへさるゝ恋  
 141 ○夢中被帰恋  
 146 ○門よりかへさるゝ恋  
 151 適来帰恋  
 156 かへさるゝ恋といふ事  
 161 随恋  
 166 後朝増恋  
 171 ○希逢後朝恋  
 176 別後難期恋  
 181 絶不逢恋
- 92 不語終隠恋  
 97 逢別恋  
 102 厭別恋  
 107 ○互惜別恋  
 112 ○不夜通別恋  
 117 遠恨恋  
 122 別不知恋  
 127 ○雨中恋  
 132 ○朝互帰恋  
 137 ○来帰恋  
 142 ○道女帰恋  
 147 ○従門帰恋落  
 152 ○喚後帰恋  
 157 忍帰恋  
 162 後朝恋  
 167 後朝切恋  
 172 山家後朝恋  
 177 一会後不逢恋  
 182 ○何処更相逢
- 93 不語終恋  
 98 急別恋  
 103 契別恋  
 108 曉別恋  
 113 深更別恋  
 118 ○隔境恋  
 123 ○露応別涙  
 128 念曉帰恋  
 133 ○旦来夕帰恋  
 138 ○見帰恋  
 143 雨中帰恋  
 148 ○至門帰恋  
 153 ○喚後又帰  
 158 ○帰来数行涙  
 163 厭後朝恋  
 168 後朝顯恋  
 173 違不逢恋  
 178 ○初会后不逢恋  
 183 与君后会知何日
- 94 別恋  
 99 念別恋  
 104 ○契別  
 109 惜曉別恋  
 114 恨鳥別恋  
 119 夢別恋  
 124 ○仍差別太頻  
 129 曉欲帰恋  
 134 深夜帰恋  
 139 ○かへるをなげく恋  
 144 空帰恋  
 149 ○立門帰恋  
 154 喚不帰  
 159 逝従恋  
 164 ○後朝待書恋  
 169 後朝隠恋  
 174 逢不逢恋  
 179 逢後不通恋  
 184 立名恋
- 95 歎別恋  
 100 ○忽別恋  
 105 ○互契恋  
 110 ○朝別恋  
 115 ○恨別鳥驚恋  
 120 ○夢中別恋  
 125 ○別来感月周  
 130 ○聞曉帰恋  
 135 深更帰恋  
 140 ○独臥帰恋  
 145 従門恋  
 150 ○関道帰恋  
 155 ○被返恋  
 160 ○追従恋  
 165 後朝見書恋  
 170 後朝恨恋  
 175 逢後難逢恋  
 180 ○別後全難期  
 185 ○名立恋

276 ○恨切恋	277 ○初疎後切恋	278 ○絶切恋	279 厭恋	280 被厭恋
271 ○怨切恋	272 恋切恋	273 ○切別恋	274 ○聞鐘切恋	275 思出切恋
266 ○初をろそかに末増恋	267 云切後増恋	268 云切初後増恋	269 切恋	270 恋切
261 ○さうしを見て恋をます	262 増思恋	263 見夢増恋	264 夢後増恋	265 ○増涙恋
256 ○いとはれてまさる恋	257 ○ふれて後まさる恋	258 遇後増恋	259 移香増恋	260 閑居増恋
251 見書増恋	252 返事増恋	253 見返事増恋	254 逢増恋	255 ○逢後増恋
246 寒夜増恋	247 逐夜増恋	248 虫声増恋	249 聞虫声増恋	250 依歌増恋
241 ○臨暁増恋	242 ○暁露増恋	243 ○夕増恋	244 ○夜増恋	245 夜長増恋
236 依雨増恋	237 ○風声増恋	238 松風増恋	239 秋風増恋	240 暁増恋
231 日増恋	232 随日増恋	233 逐日増恋	234 送日増恋	235 雨中増恋
226 問聞増恋	227 見増恋	228 聞詞増恋	229 馴増恋	230 ○馴後増恋
221 絶頭恋	222 絶後頭恋	223 増恋	224 依忍増恋	225 聞増恋
216 契後頭恋	217 契変恋	218 頭悔恋	219 頭後悔恋	220 頭絶恋
211 依涙頭恋	212 ○はじめあらはれて後しのぶ恋	213 ○通書頭恋	214 ○頭疑人恋	215 勢頭恋
206 頭恋	207 欲頭恋	208 ○夕頭恋	209 頭渡恋	210 涙頭恋
201 惜名恋	202 不惜名恋	203 惜人名恋	204 ○不惜身恋	205 ○無実有虚恋
196 隱名恋	197 遇隱名恋	198 隱名切恋	199 改名隱恋	200 ○改名蔵恋
191 借人名恋	192 ○借他名迎恋	193 歎無名恋	194 ○称他名恋	195 不知名恋
186 歎名恋	187 ○なき名	188 ○立無名恋	189 無名立恋	190 ○借名恋

- 281 ○朝厭恋 282 ○厭老恋 283 ○聞他厭恋 284 厭身恋 285 見形厭恋  
 286 いやしきをいとふ 287 厭賤恋 288 被厭賤恋 289 ○依賤被厭恋 290 ○被厭下女恋  
 291 思後世厭恋 292 厭恋思後世 293 ○亦莫厭此身<sup>世イ</sup> 294 悔恋 295 後悔恋  
 296 ○互悔恋 297 押涙悔恋 298 ○逢後悔恋 299 別悔恋 300 恨悔恋  
 301 顯後悔恋 302 恨後悔恋 303 絶後悔恋 304 悔前後恋<sup>世イ</sup> 305 ○悔離別  
 306 ○しらでくやしき恋 307 悔(離)恋 308 ○侘恋 309 疎恋 310 見被疎恋  
 311 ○逐日疎恋 312 ○音信日已恋<sup>疎イ</sup> 313 変恋 314 漸変恋 315 ○被変恋  
 316 ○朝変恋 317 ○夕変恋 318 俄変恋 319 変約恋 320 契変恋  
 321 変契恋 322 契變約恋 323 契後変恋 324 契變改恋 325 臨期変恋  
 326 臨期變約恋 327 逢後変恋 328 ○月催恋 329 風声催恋 330 曉風催恋  
 331 晚風催恋 332 雁声催恋 333 触物催恋 334 恋催旧 335 ○恋催旧恋  
 336 ○恋催懷恋 337 驚恋 338 時々驚恋 339 争恋 340 ○論恋  
 341 負恋 342 有妨恋 343 恋學問妨 344 被妨客人恋 345 被妨人恋  
 346 被妨友恋 347 ○被妨親恋 348 ○会後被妨恋 349 恋為後世妨 350 被嫉妬恋  
 351 ○被嫉妬妻恋 352 被恐勘当恋 353 隱恋 354 ○誓隱恋 355 会後隱恋  
 356 留形見隱恋 357 乍在隱恋 358 教居隱恋 359 隱在所恋 360 ○隱住所恋  
 361 ○藏在所恋 362 ○隱家恋 363 隱宅恋 364 不語終隱恋 365 隱文業和歌恋  
 366 恨隱恋 367 隱傍女恋 368 稀恋 369 忍稀恋 370 ○依忍稀恋  
 371 稀驚恋 372 稀問恋 373 稀通恋 374 漸稀恋 375 ○会稀歲月恋

- 376 ○邂逅恋  
 381 遠恋  
 386 隔日頃恋  
 391 隔月恋  
 396 隔関恋  
 401 隔海恋  
 406 ○隔物臥恋  
 411 ○人にしらるゝ恋  
 416 不知人恋  
 420 ○不知居所恋  
 425 ○遇事をうらなふ  
 430 互片思恋  
 435 思  
 440 ○おもひわづろふ  
 445 ○互おもひしらする恋  
 449 はじめ思はで後に思ふ恋の心を  
 453 昼夜思恋  
 458 ○初逢後思出恋  
 463 思出旧女恋  
 377 久恋  
 382 近恋  
 387 ○隔夜恋  
 392 隔年恋  
 397 隔関路恋  
 402 隔海路恋  
 407 すだれをへだてたる恋  
 412 知不知恋  
 417 不被知人恋  
 421 不知為方  
 426 ○問巫女恋  
 431 曉片思  
 436 思恋  
 441 ○思疲恋  
 446 ○相思恋  
 454 ○時々思  
 459 夕思出恋  
 464 ○晴疑無限恋  
 378 旧恋  
 383 隔恋  
 388 隔一夜恋  
 393 隔年序恋  
 398 隔路恋  
 403 ○隔浦恋  
 408 ○隔衣恋  
 413 思未知人恋  
 418 すみかをしらさぬ恋  
 422 ○心知人不知  
 427 片思  
 432 尋常片思  
 437 恋思  
 442 相思  
 447 かたみにこふ  
 450 初疎後思恋  
 455 思昔恋  
 460 触事思出恋  
 465 忘恋  
 379 旧事恋  
 384 隔霞恋  
 389 隔二夜恋  
 394 隔山恋  
 399 隔遠路恋  
 404 ○隔万里恋  
 409 被知恋  
 414 恋不思程  
 423 占恋  
 428 片恋  
 433 ○片思をはづる  
 438 ○思不定恋  
 443 互思恋  
 448 はじめ思はで後に忍ぶ恋  
 451 ○夕思  
 456 思二世恋  
 461 見家思出恋  
 466 欲忘恋  
 380 ○古恋  
 385 ○隔日来恋  
 390 ○隔三夜恋  
 395 隔谷恋  
 400 隔川恋  
 405 隔物談恋  
 410 ○人にしらるゝ  
 415 不知身程恋  
 419 不知在所恋  
 424 ○卜恋  
 429 片思恋  
 434 ○片思恨  
 439 思煩恋  
 444 ○相互思恋  
 452 ○夜思  
 457 思出恋  
 462 ○昔思出恋  
 467 ○忘始恋

468 ○夕忘恋	469 被忘恋	470 忍忘恋	471 ○契忘恋	472 易忘恋
473 難忘恋	474 難忘歎恋	475 不忘恋	476 ○恨不忘恋	477 ○触事不忘恋
478 ○恋更不忘恋	479 被忘後恋	480 忘久恋	481 惜秋忘恋	482 被忘人恋
483 ○被忘恋人	484 忘後恋人	485 忘住所恋	486 ○忘身恋	487 ○恨忘恋
488 恨	489 恨恋	490 ○恋恨	491 怨恋	492 ○被恨恋
493 忍恨恋	494 乍恨忍恋	495 心中恨恋	496 恨心中恋	497 ○不言恨恋
498 恨不言恋	499 恨言恋	500 佯人怨恋	501 人佯恨恋	502 怨恨恋
503 立聞怨恋	504 不来恨恋	505 夜恨恋	506 恨短夜恋	507 聞詞怨恋
508 披書恨恋	509 ○見書恨恋	510 ○恨増恋	511 増恨恋	512 ○恨経年恋
513 恨久恋	514 久恨恋	515 不語被怨恋	516 不語被恨恋	517 不談被怨恋
518 ○聞無実恨恋	519 ○乍恨恋	520 恨偽恋	521 互恨恋	522 互有恨恋
523 ○共恨恋	524 恨身恋	525 恨人恋	526 ○怨人恋	527 恨無恋
528 恨前世恋	529 ○独恨恋	530 被忘恨恋	531 ○恨変契恋	532 ○夢中恨恋
533 ○逢夢恨恋	534 ○触事恨恋	535 欲絶恨恋	536 絶恨恋	537 絶怨恋
538 恨後絶恋	539 ○怨会他人恋	540 ○依忘隣怨	541 ○別恋	542 ○恨夢
543 絶恋	544 ○未絶恋	545 不絶恋	546 欲絶恋	547 忍絶恋
548 互忍絶恋	549 ○絶析恋	550 ○一夜逢絶恋	551 変契絶恋	552 ○絶音信恋
553 恨絶恋	554 絶恨恋	555 互恨絶恋	556 絶後恋	557 絶久恋
558 頭後絶恋	559 ○絶驚恋	560 絶後驚恋	561 ○絶悔恋	562 絶互悔恋

563 ○絶不逢恋	564 絶不忘恋	565 不忘絶恋	566 ○不慮絶恋	567 絶不知恋
568 絶経年恋	569 再絶恋	570 絶後形見	571 恨身絶恋	572 憚人絶恋
573 ○帰無書絶恋	574 ○赴東国絶恋	575 ○赴西国絶恋	576 恋天象	577 ○恋日
578 ○日中恋	579 ○元日恋	580 ○期明後日恋	581 恋地儀	582 恋雑物
583 経日恋	584 経月恋	585 恋月	586 月夜恋	587 月前契秋後
588 月前待恋	589 寄月待人	590 ○月前恋人	591 対月 <small>月前恋イ</small> 恋人	592 ○月顯忍恋
593 ○月前祈恋	594 ○月下待恋	595 月前逢恋	596 月前別恋	597 曉別恋
598 月増恋	599 恋依月増	600 ○依月増恋	601 ○月前増恋	602 見月増恋
603 ○対月増恋	604 月前顯恋	605 ○月前久恋	606 ○月増久恋	607 月前遠恋
608 月前恋	609 月前忍恋	610 月前契恋	611 月前恨恋	612 月前絶恋
613 ○月前驚恋	614 九月ふたつ有ける年閏月をいむ恋といふ事を人々よみける		615 ○月前恋情	
616 ○月満枕恋	617 ○月宿涙恋	618 ○恋閏月恋	619 毎月逢恋	620 恋風
621 嵐前恋人	622 ○恋雲	623 恋雨	624 雨中恋	625 ○雨中待人
626 ○雨中帰恋	627 ○依雨返車恋	628 約雨霽	629 ○約雨霽恋	630 隔雨恋
631 雪中恋	632 ○雪夜恋	633 霧中恋	634 ○恋煙	635 経年恋
636 経年 <small>月イ</small> 同恋	637 ○としを送る恋	638 四季恋人		

以上、煩を厭わず『補缺類題和歌集』恋部二に収録される歌題のすべてを掲げたが、この六百三十八題の歌題は、『類題和歌集』に収載される歌題四百十八題のうちの四百十六題と重複している。ということは、『補缺類題和歌集』には二百三十二題もの『類題和歌集』に未収録の歌題（○を付した歌題）が収載されていることになるが、これは、『補缺類題和歌集』

がいかにかに大量の歌題を『類題和歌集』に添加し、増補した類題集であるかを意味しようが、この点にこそ、『補缺類題和歌集』の属性が認められるといえるであろう。ちなみに、『補缺類題和歌集』に未収録の『類題和歌集』の歌題は、「互別恋」と「暁帰恋」の二題である。

なお、以上に掲げた本集の歌題を、後水尾院撰『類題和歌集』をはるかに凌駕し、諸歌集にみえる歌題はほぼ網羅的に採録している霊元院撰『新類題和歌集』と比較すると、『新類題和歌集』は『補缺類題和歌集』が収載する五十題（上記の歌題番号で示すと、1・9・12・14・50・56・82・84・94・108・143・147・159・162・173・174・176・185・193・204・206・216・217・258・272・301・307・313・334・367・368・377・378・381・384・398・399・427・469・491・492・520・543・547・581・582・588・590・608・610のとり）もの歌題を欠落している。この点も、『類題和歌集』を増補した『補缺類題和歌集』が、いかに歌題蒐集の側面で優れた内容を完備した類題集になりえているかを証するであろう。ちなみに、『新類題和歌集』が有し、『補缺類題和歌集』が欠く歌題は、「人不被知恋」（417と418の間）「聞怨我恋」（503と504の間）「恨欲絶恋」（534と535の間）「月驚絶恋」（615の前）の四題にすぎない。

ところで、歌題配列の視点から『類題和歌集』と『補缺類題和歌集』とを比較すると、『類題和歌集』では  $\boxed{1 \sim 582} + \boxed{620}$  ところで、 $\boxed{634} + \boxed{583 \sim 586} + \boxed{608 \sim 610} + \boxed{587 \sim 607} + \boxed{611 \sim 619} + \boxed{635 \sim 638}$  のように、各歌題は連続している。ちなみに、『新類題和歌集』の歌題配列は、『類題和歌集』に依拠していながら、実は、『類題和歌集』のそれとは異同して、ほぼ『補缺類題和歌集』の配列方法と一致をみているのだ。この点は、もし『新類題和歌集』が『補缺類題和歌集』に依拠しているとしたら、歌題数で五十題も『補缺類題和歌集』よりも『新類題和歌集』が少ない実態の理由は目下、充分に説明しえないけれども、『新類題和歌集』が『補缺類題和歌集』に依拠していることは明白であろう。その意味でも、『補缺類題和歌集』の存在価値は高いと評価されるであろう。

## 四 収載歌の問題

以上の叙述によって、『補缺類題和歌集』が類題集の基本的特質である歌題の側面で十二分の条件・資格を備えた類題集であることが実証しえたであろうが、それでは、『補缺類題和歌集』は多種多彩で豊富な歌題に、どのような例歌（証歌）を掲げているのであろうか。ここではその点を究明するために、任意に選んだ「隔川恋」の歌題の例歌（証歌）を引用してみよう。

40 稀にだにあふよもあらば天川へだつるほしやたぐひならまし

（隔川恋・家集・行宗・一六三三）

41 恋わたる中にしもなど名にもおはぬあらくま川の流そめけん

（林葉・俊恵・一六三四）

42 うきしづみつれなき中の思ひ川あふせや波に立へだつらん

（公宴統哥寛正四四廿五・雅行・一六三五）

43 恋渡るうき身はとをき渡ぞと立名もつらし天の川波

（同同年十一廿五・後花園院・一六三六）

44 山しろのみつ野、里に妹をきて幾度淀に舟よばふらん

（千載・頼政・一六三七）

45 年ふれど渡らぬ中にながるゝをあぶくま川と誰かいひけん

（新後撰・民部卿成（範）朝臣・一六三八）

46 妹がすむ里のこなたの衣川わたらぬ折も袖ぬらしけり

（同・藤原親盛・一六三九）

47 わたりこぬいもがすみかを尋ねればあぶくま川のあなた也けり

（頼政・一六四〇）

48 扱もなを渡らぬさ<sup>中イ</sup>きのよしの川よしやいもせの山もかひなし

（師兼・一六四一）

この40～48の九首が「隔川恋」の題歌であるが、このうち、44～48の五首は『類題和歌集』に収載をみる例歌である。ということとは、『補缺類題和歌集』は40～43の四首を、『源太府卿集』『林葉集』『公宴統歌』などによって「補缺」、増補している編纂事情を意味するであろう。ここに、『補缺類題和歌集』の編者が、歌題の場合と同様に、例歌（証歌）の側面においても、内容的により充実した、過不足のない類題集の完成をめざしていた編纂意図が窺知されようが、それでは、『補

『缺類題和歌集』恋部二において増補、補缺された例歌（証歌）ははたして、どの程度の分量になるのであろうか。以下の記述は、この問題について、増補された例歌の数量の視点から試みた整理、一覧である。単なる数値の羅列は無意味だと非難する向きがあるかも知れないが、実は、筆者はこの点にこそ『補缺類題和歌集』の属性、価値があると判断して、あえて掲げた次第である。なお、この数値は版本・北駕文庫本『類題和歌集』がともに収載しない、『補缺類題和歌集』のみが有する例歌の数である。

会恋（9首）・俄逢恋（3首）・俄初逢恋（4首）・白地逢恋（1首）・尋逢恋（2首）・契逢恋（2首）・互契恋（1首）・逢契恋（1首）・待逢恋（1首）・祈恋（14首）・年々逢恋（1首）・及暁遂恋（1首）・夕遇恋（1首）・逢夜有妨恋（1首）・隔一夜逢恋（1首）・隔夜逢恋（1首）・逢後恋（1首）・会后恋（1首）・辞後会恋（4首）・逢切恋（4首）・逢後切恋（2首）・名をかへてあふ恋（1首）・適逢恋（6首）・適逢空恋（1首）・邂逅会恋（2首）・時々逢恋（2首）・稀会不絶恋（6首）・稀逢絶恋（2首）・忘逢恋（1首）・逢恨恋（1首）・絶後逢恋（3首）・みちに中にあふ恋（1首）・人違逢恋（1首）・怨遇人恋（1首）・ト過恋（2首）・逢夢恋（17首）・夢会恋（3首）・夢逢恋（3首）・夢中逢恋（11首）・相对如夢寝（1首）・迎不遂恋（1首）・語恋（1首）・並枕語恋（3首）・隔物談恋（1首）・夢中談恋（1首）・欲別恋（7首）・人にわかる、恋（1首）・急別恋（3首）・念別恋（6首）・忽別恋（2首）・忍別恋（6首）・契別恋（1首）・惜別恋（10首）・互惜別恋（1首）・朝別恋（1首）・深夜別恋（1首）・不夜通別恋（1首）・恨別鳥驚恋（3首）・恨別恋（2首）・隔境恋（1首）・夢中別恋（1首）・別後恋（1首）・露心別恋（1首）・仍差別太頻（2首）・別来歲月周（1首）・帰恋（2首）・雨中恋（1首）・暁欲帰恋（1首）・聞暁鐘欲別恋（1首）・朝互帰恋（2首）・旦来夕帰恋（1首）・深夜帰恋（10首）・深更帰恋（14首）・よごとにかへさる、恋（1首）・来帰恋（1首）・見帰恋（1首）・かへるをなげく恋（1首）・独臥帰恋（1首）・道女帰恋（1首）・従門（帰）恋（9首）・門よりかへ

さるゝ恋(1首)・従門帰恋落(1首)・立門帰恋(1首)・関道帰恋(1首)・喚後帰恋(1首)・喚後又帰(1  
 首)・被返恋(1首)・忍帰恋(1首)・帰来数行涙(2首)・追従恋(1首)・後朝待書恋(1首)・後朝増恋  
 (1首)・後朝切恋(17首)・後朝隠恋(7首)・後朝恨恋(1首)・初会后不逢恋(9首)・別后会難期(3首)・  
 何処更相逢(5首)・立名恋(5首)・歎名恋(5首)・なき恋(3首)・立無名恋(2首)・借名恋(2首)・借  
 人名恋(6首)・借他名迎恋(1首)・隱名恋(2首)・遇隱名恋(1首)・改名蔵恋(1首)・惜人名恋(1  
 首)・無実有虚恋(2首)・欲顯恋(11首)・依涙顯恋(1首)・はじめあらはれて後しのぶ恋(1首)・通書顯恋  
 (1首)・顯疑人恋(1首)・顯悔恋(5首)・絶顯恋(1首)・絶後顯恋(2首)・増恋(11首)・依忍増恋(2  
 首)・見増恋(7首)・馴後増恋(2首)・逐日増恋(11首)・風声増恋(1首)・臨曉増恋(1首)・曉露増恋  
 (1首)・夕増恋(2首)・夜増恋(2首)・夜長増恋(1首)・寒夜増恋(1首)・見書増恋(9首)・返事増恋  
 (8首)・見返事増恋(2首)・逢増恋(7首)・逢後増恋(2首)・いとほれてまさる恋(1首)・ふれて後まさ  
 る恋(1首)・移香増恋(1首)・さうしを見て恋をます(1首)・初をろそかに末増恋(1首)・切恋(9首)・  
 初疎後切恋(11首)・絶切恋(1首)・厭恋(12首)・被厭恋(17首)・見形厭恋(12首)・厭賤恋(12首)・被厭  
 賤恋(9首)・依賤被厭恋(2首)・被厭下女恋(1首)・思後世厭恋(1首)・厭恋思後世(1首)・亦莫厭此身  
 (2首)・悔恋(12首)・後悔恋(1首)・互悔恋(1首)・逢後悔恋(3首)・別悔恋(1首)・絶後悔恋(2  
 首)・悔前後恋<sup>世イ</sup>(1首)・しらでくやしき恋(1首)・逐日疎恋(1首)・音信日已恋<sup>疎イ</sup>(2首)・朝変恋(1  
 首)・俄変恋(4首)・変約恋(1首)・契変恋(1首)・臨期変恋(7首)・臨期変約恋(3首)・月催恋(2  
 首)・曉風催恋(1首)・晚風催恋(2首)・恋催旧恋(1首)・驚恋(1首)・時々驚恋(11首)・論恋(1  
 首)・負恋(6首)・恋学問妨(1首)・被妨人恋(2首)・被妨友恋(1首)・被妨親恋(1首)・一会後被妨恋  
 (1首)・恋為後世妨(12首)・被嫉妬恋(2首)・被嫉妬妻恋(1首)・隱恋(13首)・隱在所恋(6首)・隱住所

恋(1首)・藏在所恋(1首)・忍稀恋(1首)・依忍稀恋(1首)・稀驚恋(1首)・稀問恋(13首)・会稀歲月  
 恋(2首)・邂逅恋(1首)・近恋(14首)・隔恋(7首)・隔日来恋(1首)・隔夜恋(3首)・隔一夜恋(2  
 首)・隔三夜恋(1首)・隔年序恋(1首)・隔山恋(2首)・隔関恋(4首)・隔遠路恋(12首)・隔川恋(4  
 首)・隔海路恋(13首)・隔浦恋(1首)・隔万里恋(1首)・隔物談恋(2首)・隔衣恋(1首)・被知恋(2  
 首)・人にしらる、(1首)・思未知恋(1首)・恋不知程(9首)・不知身程恋(2首)・不被知人恋(1首)不  
 知在所恋(1首)・不知居所恋(2首)・心知人不知(4首)・占恋(7首)・卜恋(9首)・問巫女恋(1首)・  
 片恋(12首)・片思恋(1首)・尋常片思(2首)・片思をはづる恋(1首)・片思恨(5首)・思(13首)・おも  
 ひわづらふ(1首)・思疲恋(1首)・相思(1首)・互思恋(3首)・相互思恋(1首)・初疎後思恋(6首)・  
 夕思(1首)・夜思(1首)・時々思(1首)・思出恋(1首)・初逢後思出恋(1首)・触事思出恋(2首)・見  
 家思出恋(1首)・昔思出恋(1首)・思出旧女恋(1首)・晴疑無限恋(2首)・欲忘恋(1首)・忍忘恋(1  
 首)・難忘恋(10首)・忘久恋(3首)・被忘人恋(1首)・忘後恋人(1首)・忘住所恋(7首)・恨(14首)・  
 恋恨(1首)・被恨恋(2首)・忍恨恋(2首)・心中恨恋(1首)・恨心中恋(2首)・不言恨恋(6首)・伝人  
 怨恋(1首)・人伝恨恋(12首)・恨短夜恋(1首)・聞詞怨恋(1首)・披書恨恋(10首)・見書恨恋(1首)・  
 恨増恋(1首)・増恨恋(4首)・恨経年恋(1首)・恨久恋(2首)・不語被恨恋(1首)・共恨恋(1首)・恨  
 身恋(9首)・恨世恋(2首)・独恨恋(2首)・夢中恨恋(1首)・触事恨恋(1首)・絶恨恋(1首)・絶怨恋  
 (2首)・恨後絶恋(1首)・依忘隣怨(1首)・欲絶恋(6首)・忍絶恋(1首)・一夜逢絶恋(1首)・恨絶恋  
 (19首)・互恨絶恋(7首)・絶後恋(7首)・絶久恋(10首)・絶後驚恋(1首)・絶恨恋(5首)・絶互恨恋(2  
 首)・絶不逢恋(1首)・不慮絶恋(1首)・絶不知恋(9首)・絶経年恋(11首)・再絶恋(1首)・憚人絶恋  
 (1首)・帰無書絶恋(4首)・恋天象(6首)・恋日(1首)・日中恋(1首)・元日恋(1首)・経日恋(1

首・経月恋(2首)・月夜恋(2首)・月顯忍恋(1首)・月前祈恋(1首)・月下待恋(2首)・月前逢恋(1首)  
 首・暁別恋(2首)・恋依月増(2首)・月前増恋(2首)・対月増恋(2首)・月前顯恋(1首)・月前久恋  
 (1首)・月増久恋(1首)・月前恨恋(3首)・月前驚恋(3首)・月前恋情(1首)・月満枕情(1首)・月宿  
 涙恋(1首)・恋風(2首)・恋雲(2首)・雨中恋(6首)・雨中待人(1首)・雨中帰恋(1首)・依雨返事恋  
 (1首)・約雨霽恋(1首)・霧中恋(2首)・恋煙(2首)・経年恋(11首)・経年同恋<sup>月イ</sup>(4首)・としを送る恋  
 (1首)

以上、煩を厭わず『補缺類題和歌集』のみが収載する歌題と例歌を掲載したが、これを整理すると、本集は、後水尾院  
 撰『類題和歌集』に総計千六十四首の例歌(証歌)を増補している実態が知られる。ちなみに、ここにその例歌のすべて  
 を掲げることは、残念ながら紙幅の関係で不可能であるが、増補歌のうち、次の

- 49 いつかみん夢をばしらず折／＼のみのうきかずぞをどろかれぬる (時々驚恋・続撰抄・一三六五)  
 50 いつをさて思ふにたゆむ心とて心の我を驚かすらん (同・同・一三六六)  
 51 猶ぞうき年のわたりに立まじる便りばかりは絶まがちに (同・一三六八)  
 52 せめて又忘れはつなと折々に又をどろかす中はかひなし (同・着到公・一三六九)  
 53 はらひこしあとより道の露けさも又色迄の蓬生の宿 (同・一三七〇)  
 54 更に我よそにうつらんこゝろとも無をあるにや人のなしけん (被嫉妬妻恋・一四一六)  
 55 俤はみし三日月のわれてより有明の空にうつりきぬらん (隔夜恋・一五七九)  
 56 うきながらいひ初しよりかはらぬは思はれながらえこそ恨ね (尋常片恋・一七五〇)  
 57 けぶり立ふじの高ねのよそにだにきへぬ思を空にしりつ、 (思・一七六三)  
 58 いかにせんか□か□人の思ひ川せゝにながれぬ下の心を (同・一七六四)

59 よのつねのいひ□□べき恨をもたへ忍ぶ身はふかき心を

(恨心中・二〇三〇)

の49～59の十一首については、目下、詠歌作者が判然としないので、この十一首を除いた千五十三首は、いかなる歌人の詠歌であるかを、次に整理してみよう。

(表1) 五首以上の増補歌作者一覧表

詠歌作者	歌数	詠歌作者	歌数	詠歌作者	歌数
1 実隆	一二三首	16 永宣	一一首	25 重治	七首
2 後柏原院	六五首	16 実枝	一一首	25 親長	七首
3 政為	五六首	19 邦高親王	一〇首	35 俊頼	六首
4 俊恵	四六首	19 雅俊	一〇首	35 俊成	六首
5 公条	四四首	21 慶運	九首	35 後二条院	六首
6 雅親	三八首	21 義政	九首	35 康親	六首
7 為広	二五首	23 慈円	八首	39 定家	五首
8 為理	二二首	23 兼好	八首	39 秀能	五首
8 基綱	二二首	25 為信	七首	39 有房	五首
8 濟継	二二首	25 宗祇	七首	39 為定	五首
11 頼阿	一八首	25 為孝	七首	39 宣秀	五首
12 後土御門院	一四首	25 貞敦親王	七首	39 教国	五首
13 肖柏	一三首	25 元長	七首	39 公音	五首
15 龜山院	一二首	25 持為	七首	合計	七四九首
16 為家	一一首	25 実香	七首		

この(表1)をみると、五首以上の詠歌作者のみで、全体の七十一・一パーセントを占めていることが知られよう。そして、増補歌のうち、圧倒的多数が室町中期以降の歌人の詠歌で占められているなか、平安後期、鎌倉前・中期、南北朝

期の歌人の詠歌が幾分命脈を保っている実態も把握できるであろう。すなわち、近世初期宮廷歌壇で重んじられた三玉集の作者のうち、三条西実隆が断然トップで、次いで後柏原院、下冷泉政為が続いているが、興味深いのは、源俊頼の男で、新古今歌風にも少なからぬ影響を与えた『詞花集』初出の俊恵がそれに続いていることである。次に、室町期では、実隆の男・公条、公条の男・実枝や、飛鳥井雅親、その男の雅俊、下冷泉政為と並称された上冷泉為広、姉小路基綱、その男の済継、高倉永宣などの廷臣歌人、皇室関係では、百二代の後花園天皇、その皇子の第百三代の後土御門天皇、後柏原院の皇子・第百五代の後奈良天皇、伏見宮家の邦高親王（五世）、貞敦親王（六世）、将軍家では、足利義政、また連歌の方面でも活躍した牡丹花肖柏、飯尾宗祇などが陸続するなか、南北朝期では、為世の和歌四天王のうちの頼阿・慶運・兼好、二条為定など、鎌倉後期では、後二条院、後二条院に近侍した藤原為理、鎌倉前期では、藤原為家、龜山院、法性寺為信、六条有房など、新古今時代では、慈円、藤原俊成、同定家、同秀能などの歌人がめだつ存在である。そして、このあとに続くのは、やはり室町期の政為の男・為孝、甘露寺親長、その男の元長、下冷泉持為、三条実香、竹内重治、中山康親、中御門宣秀、滋野井教国、四辻公音などの廷臣歌人である。

増補歌の詠歌作者の傾向はおおよそ以上のような傾向にあるが、ちなみに、四首以下の増補歌人を掲げるならば、以下のごとくである。

〔四首収載歌人〕 阿仏尼・伊長・覚性法親王・雅経・雅世・雅有・堯孝・光経・時朝・実家・順徳院・範宗・右京大

夫（建礼門院）・良春

〔三首収載歌人〕 為藤・覚綱・雅行・雅綱・季春・経家・顕氏・言綱・勾当内侍・後小松院・左大臣・寂蓮・周嗣・

常縁・親清女・冬光・道堅・頼宗・和長

〔二首収載歌人〕 為尹・為学・为重・為富・永親・雅教・雅康・家隆・季経・季種・具氏・賢房・公瑜・広言・行

宗・高清・後京極（良経とは別人）・讃岐（二条院）・資隆・慈運・守光・重親・俊光・師仲・信実・親隆・西

行・宣親増運・中院一位・忠成・忠度・通秀・道欽・伏見院・右大臣・祐雅・頼輔・蓮瑜・和泉式部

〔二首収載歌人〕

為永・為教・為堯・為業・為経・為景・以緒・為世・為盛・伊宣・一条・為忠・永継・永豊・花園

院・雅永・雅兼・雅顕・勸修寺大納言・季遠・季雄・基規・義季・義尚・旧院上臈・堯胤・暁覚・堀河（待賢門院）・経信・経盛・経朝・兼秀・顕秀・公夏・公頼・光資・康光・綱光・後一条院・後崇光院・後醍醐天皇・資直・資能・資隆・師信・侍従宰相・慈道親王・持季・持通・式部卿宮・実永・実教・実将・実世・実定・秀経・秀房・重雅・俊量・小侍従・小倉・尚顕・新内侍・親清四女・仁悟・成仲・成道・清忠・盛仲・宣家・宣季・宣資・前内大臣・禪空・宗家・宗継・宗綱・宗長・宋清・尊心・尊海・大式（上西門院）・泰仲・丹後・中宮・中山宰相・中納言（妙光寺内大臣家）・仲正・忠岑・長慶院・長治・長清・長方・定資・貞常親王・土御門院・冬良・道永・南御方・邦輔・右衛門督・祐紹・頼教・頼実・頼清・隆景・隆康・良経・良守・良長

さて、『補缺類題和歌集』恋二に増補された歌の詠歌作者の収載状況は、以上のとおりだが、それでは、それらの歌人の詠歌が収載される原拠資料はいかなる作品であろうか。この点については、残念ながら、『補缺類題和歌集』の集付（出典注記）が増補歌の全部に付されていないために、その数値を正確に提示することができないので、やむを得ず、以下には原拠資料の名称をのみ、作品の種別ごとに掲げることにしたと思う。

〔勅撰集〕

新古今集・続古今集・続千載集・新拾遺集・新葉集

〔私撰集〕

今撰集・秋風集・万代集・夫木抄・続撰吟抄・摘題和歌集・続撰抄

〔私家集〕

亜槐集・顕氏集・秋篠月清集・明日香井集・有房集・郁芳三品集・石間集・覚綱集・覚性法親王集・亀山院御集・玉吟集・邦高親王集・邦輔集・慶運集・兼好自撰家集・建礼門院右京大夫集・後一条院御集・後花園院御集・後土御門院御集・後二条院御集・小侍従集・沙玉集・実家集・実定集・実永集・散木奇歌集・山家集・成仲

集・拾遺愚草・拾遺愚草員外・慈円・順徳院御集・春夢草・季経集・資隆集・雪玉集・草庵集・続草庵集・宗祇集・待賢門院堀河集・忠度集・為家集・为重集・為信集・為尹集・為理集・親清女集・親清四女集・長秋詠藻・經家集・常縁集・時朝集・俊光集・土御門院御集・二条院讃岐集・如願法師集・信家集・信実集・花園院御集・広言集・伏見院御集・雅教集・雅世集・光経集・宗家集・持為詠草・盛仲集・行宗集・義尚集・頼輔集・隣女集・林葉集・蓮瑤集

〔歌合〕 乾元歌合・宝徳三年百番歌合・寛正歌合

〔定数歌〕 三十首（道堅）・五十首（明応四年四月、済継）・五十首（明応七年十月、後柏原院・宣秀）・為忠初度

百首・為忠後度百首・寂蓮百首・難題百首（定家・為家・阿仏尼・為定）・句題百首（頼阿・良守・良春・頼宗・周嗣）・御百首（後土御門院）・百首（永享七年八月、道欽）・百首（永享八年六月、道欽・宣親）・百首（大永元年十一月、貞敦親王）・百首（大永二年八月、季雅）・百首（天文二年六月、以緒）百首・（天文六年四月、諸仲）・御着到百首（伊長・康親）・一人三臣和歌・天文千首・結題千首・龜山之大納言家千首

〔歌会歌など〕 公宴続歌（永享八年三月二十三日・同八年六月二十六日・同十一年三月十五日・同十一年七月四日・

寛正四年二月二十五日・同四年四月二十五日・同四年六月二十五日・同四年十月二十五日・同四年十一月二十五日・文明八年九月五日・同十年二月二十八日当座・同十年三月二十一日・同十年六月三十日内裏女中・同十年七月二十八日・同十二年十月二十八日・同十三年四月十八日・同十三年六月十八日・同十三年十一月十八日・同十四年十月十四日・同十六年三月二十八日内裏女中月次・同十六年四月十四日月次内裏女中・同十七年十一月十八日・同十七年五月二十一日内裏女中月次・明応四年五月聖廟・同五年四月五日聖廟・同五年十月内侍所・永正元年八月二十五日・同元年九月二十五日・同二年二月二十五日・同四年六月二十五日・同五年七月二十六日・同五年十月二十五日・同五年十一月二十四日・同六年四月二十五日・同六年七月二十五日・同七年十一月二十五日・同八年五月・

同八年六月二十五日・同九年二月二十五日・同九年四月二十五日・同九年十一月二十五日・同十四年六月二十五日・同十四年七月二十五日・同十四年十月二十五日・同十四年十一月二十五日・同十六年七月二十五日・同十七年八月二十五日・同十八年四月二十五日・同十八年八月二十五日・大永元年十月二十三日・同元年十一月二十五日・同二年四月八日・同二年八月四日・同三年八月四日・同六年四月・享祿二年三月二十五日・同三年二月二十五日・同四年二月・同四年九月二十五日・天文七年六月二十四日・永祿三年五月・年不知）・水無瀬殿法楽和歌（永正二年二月二十二日・同二年三月二十二日・同三年二月・同五年二月二十三日）・春日社法楽和歌（永正十年二月十九日）・点取和歌（文明十六年八月七日・永正元年八月十七日・同元年八月二十六日・同元年十月二十一日・同二年）

以上の整理をみると、勅撰集と私撰集および歌合からの採録が比較的少ないのに対し、私家集と歌会歌からの採録が圧倒的多数を占め、次いで定数歌がそれらに連続している実態が窺知されようが、しかし、その数値はすでに言及したように、集付が全歌に付されていないために、正確には分明でない。したがって、『補缺類題和歌集』にみられる原拠資料の多寡を知るためには、(表1)に示した増補歌の歌人一覧表と照らし合わせながら想像するほかないが、ここで想像を逞しうするならば、俊恵、雅親、為理、基綱、頓阿などについては、当該歌人の私家集である『林葉集』、『亜槐集』、『為理集』、『基綱集』、『草庵集』、『続草庵集』などからの採録が顕著であるが、そのほかの特に室町中期以降の歌人の詠歌については、そのほとんどは『公宴統歌』や『続撰吟抄』などから採歌されていると推測されるようである。

ちなみに、本集には、冷泉持為の詠歌が七首収載されているが、そのうち次の

60 いつしかとみにぞしらる、一よりのかりばの鷹の心いられて

(逢後切恋・続撰・持為・一九五)

の60の詠は、『私家集大成5』に「36 歌人佚名 ロ」(外題には『為富卿詠』)として載る私家集の二五三番歌と符合する。ところで、この歌人佚名の私家集は、井上宗雄氏によって、持為の私家集であろうと推測され、また、『新編 国歌大観』の解題では、後藤重郎・安田徳子両氏によって、正徹の『草根集』の詞書の記事の検討から、持為の私家集であろうと推

断されているが、まさにこのことを実証する事実がこの『補缺類題和歌集』に見られるのである。本集には、このような事例は、ここでは省略に従うけれども、ほかにもいくつか指摘しうる点で、資料的価値が高い類題集であると評価されるであろう。

## 五 成立の問題

以上、『補缺類題和歌集』の収載歌の問題について言及したが、それでは、本集の成立の問題についてはいかがであろうか。この問題については、書名の『補缺類題和歌集』からは、後水尾院撰『類題和歌集』の歌題のみ掲載して例歌（証歌）を欠落している箇所を「補缺」するために、本集の編纂が企画されたのであろうと憶測されようが、実は、本集はそのような目的で出版、刊行された加藤古風編『類題和歌補闕』とは趣を異にしているのである。それらの点については、ここでは改めてその具体的事実については省略に従うほかないが、すでに歌題の視点からも、収載歌の視点からも言及したように、本集は、後水尾院撰『類題和歌集』の不備を一部補訂するというような、部分的に補修、修復を目的にした編纂方針のもとに完成した類題集ではなくて、後水尾院撰『類題和歌集』を基本にして全面的に改訂を施そうと企図して成立した類題集であると推測されるであろう。その編纂過程を、ここで憶測を逞しうして推測すると、編者はまず、後水尾院撰『類題和歌集』の写本・版本などを基本台帳にして、それに実隆・後柏原院・政為をはじめとする室町中期の歌人については、『公宴統歌』『続撰吟抄』などの歌会歌や私撰集を主要な撰集資料として、また、俊恵、頼阿、雅親、為理などの平安後期から室町前期ごろまでの主要歌人については、当該歌人の私家集である『林葉集』、『草庵集』、『続草庵集』、『亜槐集』、『為理集』などを主要な撰集資料としたうえで、さらに種々様々な歌書や詠草などを参看して、現時点で可能な限り、過不足のない類題集の再編纂を試みたのではなからうか。

それでは、『補缺類題和歌集』の成立時期は何時であろうか。この問題については、(表1) そのほかに整理したように、本集に収載歌人の下限が室町後期ごろまでに活躍した歌人で占められていることや、本集が参考した後水尾院撰『類題和歌集』の伝本が元禄十六年(一七〇三)正月刊行の版本であるらしいことから、成立時期の上限は元禄十六年(一七〇三)二月以降と想定されるであろう。それでは、本集の成立時期の下限は何時ごろと想定しうるであろうか。この点については明確に実証する証拠に欠けるが、たとえば、『類題和歌補闕』に掲載する次の

61 及暁遂会恋 家集 よもすがら妹が結べるしたひも鐘とともに打とけにけり

頼政(一八八四)

62 早日逢恋 林葉 鳴ぬなり鳥はそらねにあらねども明てもとをす逢坂の関

俊恵(一八八五)

の61・62の記述は参考になるのではなからうか。すなわち、『類題和歌補闕』の62の例歌は「早日逢恋」の歌題にはふさわしくない証歌であるのだ。というのは、62の例歌は、俊恵の『林葉集』には「及暁遂会」の歌題のもとに掲載されているので、当然「及暁遂会恋」の題歌として61に連続して掲げられるはずであるからだ。なぜ『類題和歌補闕』においてこのような誤謬がなされたのか、その背景を探てみると、実は、『類題和歌補闕』の編者・加藤古風が、『補缺類題和歌集』に依拠して例歌の欠落している「早日逢恋」の題歌を補充した編纂過程が推測されるのである。すなわち、『補缺類題和歌集』の「及暁遂会恋」の例歌には61・62の両歌が掲載されているが、「早日逢恋」の歌題の例歌は補充されてはいず、欠落したままであるのだ。もちろん、版本『類題和歌集』には、「及暁遂会恋」「早日逢恋」の題歌はともに欠落する一方、北駕文庫蔵『類題和歌集』には、61の詠歌のみが掲げられているが、62の歌は掲載されていない。したがって、『補缺類題和歌集』の編者がこのような誤りを犯すとしたら、言うまでもなく、両『類題和歌集』を参照したからではなく、『類題和歌補闕』を参考したからであろう。つまり、61・62の「及暁遂会恋」の題歌が連続して掲載されていた『類題和歌補闕』を参照した際に、『補缺類題和歌集』の編者が、ついつつかり連続して例歌が欠落していた「及暁遂会恋」「早日逢恋」の歌題のうち、「及暁遂会恋」の例歌である62の詠を、「早日逢恋」の例歌としてしまったというように考慮するのが、もっと

も妥当性を有するのではあるまいか。となれば、『補缺類題和歌集』の成立時期の下限は、加藤古風編『類題和歌補闕』（版本）の成立時期である文政十年（一八二七）三月より以前ということになる。

要するに、『補缺類題和歌集』の成立時期は、現在のところ、元禄十六年（一七〇三）二月から文政十年（一八二七）三月までの間となろうが、このほか、本集の書写年月日が江戸中期ごろと推測される以外には、本集の成立年時を想定する根拠が見出しえないのは残念である。

ところで、本集は恋部二のみの孤本であるが、この恋部二のみで歌数二千五百四十三首を数える大規模の類題集である。となると、『補缺類題和歌集』はどの程度の規模の類題集であったのであろうか。ここでこの点について憶測してみよう。まず、すでに言及したように、基本的には『補缺類題和歌集』が版本『類題和歌集』に依拠した可能性は高いので、歌題について両者を比較してみると、本集の恋部二の歌題数は六百三十八題であるのに対し、『類題和歌集』のそれは四百十八題であつて、本集は『類題和歌集』の一、五二倍の比率で多量に有していることが判明する。一方、同じ条件のもとで例歌（証歌）について比較してみると、本集は二千五百四十三首であるのに対し、『類題和歌集』は千三百七十九首で、本集は『類題和歌集』の一、八四倍の比率で多量に有していることも判明する。ところで、版本『類題和歌集』の各部立別の歌題および歌数の実態については、『日本古典文学大辞典 第六卷』（昭和六〇・二、岩波書店）によると、

【内容】元禄十六年版本では、春五九四五首（二二五八題）、夏二九六九首（一一〇一題）、秋六一九五首（二四七〇題）、冬三二七九首（二二七九題）、恋五四九六首（二四七九題）、雑・公事五五九六首（二二九八題）、経二万九三八首・一万八八五題に及ぶ龐大な類題集である。（後略）

〔八嶋正治〕

のごとくである由だから、この数値をもとに『補缺類題和歌集』の完本の内容を憶測して想定してみると、まことに単純な算出である点が憚られるけれども、次のとおりである。

春部 三四四六題 一〇九六三首

夏部	一六八〇題	五四七五首
秋部	三七七〇題	一一四二四首
冬部	一九五二題	五八六二首
恋部	二二五七題	一〇一三五首
雑・公事部	三五〇七題	一〇三二〇首
合計	一六六二二題	五四一七九首

この整理によると、『補缺類題和歌集』の完本は、歌題一万六千六百十二題、例歌（証歌）五万四千百七十九首を数える、現時点では最大級の類題集であつた可能性が示唆されるが、これは断つたように、単純な憶測でしかないので、いまは本集の恋部二以外の散佚した写本の一日もはやい出現を期待するばかりである。

## 六 ま と め

以上、松野陽一氏ご架蔵の『補缺類題和歌集』（恋部二）なる類題集について、種々様々な視点から検討を加えた結果、いくつかの問題点を明白にすることを得たので、以下にはそれらの成果を摘記して、結論にしたいと思う。

（１）『補缺類題和歌集』は現在のところ、松野陽一氏のもとに恋部二のみが写本一冊として伝存する。

（２）本集は、後水尾院撰『類題和歌集』の伝本のうち、版本と北駕文庫蔵のそれと比較、検討してみたところ、前者との関係が基本的に濃厚に認められる一方、部分的には後者との関係もまま認められるようだ。

（３）歌題の視点からみると、本集は六百三十八題を有するが、その内訳は、版本が有する四百十八題のうち、大半の四百十六題と重複する一方、版本の有する二題を欠落するという実態である。ちなみに、靈元院撰『新類題和

歌集』は、本集が有する歌題のうち、五十題が未収録である。

- (4) 歌題の配列では、本集は『類題和歌集』とは多少異同が認められるが、基本的には『新類題和歌集』と符合している。

- (5) 収載歌の視点からみると、本集は『類題和歌集』に千六十四首の増補をしているが、そのうち、十一首の詠歌作者は分明でないので、この十一首を減じた千五十三首が詠歌作者の知られる増補歌となる。

- (6) 増補歌の上位十五位に入る歌人は、実隆、後柏原院、政為、俊恵、公条、雅親、為広、為理、基綱、濟繼、頼阿、後土御門院、後花園院、肖柏、龜山院のとおりである。

- (7) 増補歌の原拠資料で圧倒的多数を占めるのは『公宴統歌』や『続撰吟抄』などの歌会歌や私撰集で、次いで多いのは『林葉集』『亜槐集』『為理集』『基綱集』『草庵集』などの私家集である。

- (8) 本集の成立時期は現在のところ、版本『類題和歌集』の刊行された元禄十六年（一七〇三）から、『類題和歌補闕』の刊行された文政十年（一八二七）までの間としか推定しえない現況にある。

- (9) 本集の性格は、加藤士古風編『類題和歌補闕』のような、『類題和歌集』の例歌（証歌）の欠落した箇所を「補缺」することを目的に撰集されたのではなくて、『類題和歌集』そのものをさらに全面改訂することを目的に撰集されたという点に窺知されようか。

- (10) 本集の完本の内容を憶測するならば、春部・夏部・秋部・冬部・恋部・雑公事部に、歌題一万六千六百十二題、例歌（証歌）五万四千百七十九首を収載する、史上最大の規模を誇る類題集であったと想定されようか。

なお、『補缺類題和歌集』については、このほかにも究明しなければならない問題は山積していると言わねばなるまいが、本集の基本的な問題についてほぼ明白にしえたいまは、残された問題は今後の課題とすることにして、一応、このあたりで擱筆することにしたと思う。

## 〔付記〕

本稿を執筆するに際して、貴重なご架蔵の『補缺類題和歌集』を長期間にわたって貸与してくださった松野陽一氏に、厚く御礼申し上げます。